

公的に言語政策が実施され、多くの著名なケベック出身者が首都オタワへ魅かれていったが、ケベックにおけるナショナリズムの高揚に歯止めをかけることにはならなかった。一方、ケベック・ナショナリズムは西部をはじめカナダ各地で強い反感を呼んだ。この反感は、連邦・州首脳会議で政治家が発する常套文句をもつてしても、おおいにかくすことはできなかった。これにより、ケベックのナショナリズムは、トルドー首相の二言語政策によって取まるところか、さらに強まっていた。一九七六年の夏、フランス語系の航空管制官やパイロットがケベック上空でフランス語をしようとしたため、英語系カナダ人はカナダの航空輸送が混乱するとして騒いだ。ケベック州民はこれに憤慨した。この事件は、一九七六年十一月に、ルネ・レベック氏の率いる分離派政党ケベック党を勝利に導いたきわめて大きな要因となった。

一九七八年、トルドー政府は、連邦政府においては二言語主義が確立された、今後のことは二言語教育の発展に待つ、と述べた。しかし、実際は二言語主義が確立していたのは建て前上のことであつた。しかも、二言語主義の良さはともかくとして、連邦政府は「国民にフランス語を無理強いしようとしている」という一般の人々の誤解（州や市町村の政治家が注意深くそういう誤解を広めていった）があつて、政治的な波乱を含んでいた。

トルドー政府は、一九七四年の選挙戦で勝利を取めたあと、再びその方向を失つたようである。立派な法律が法令集に加えられ、重要な政策も決定された。し

カナダ新閣僚の顔ぶれ

外相にマクドナルド女史、 蔵相はクロズビー氏

カナダの十六代目の首相に就任したクラーク首相の新内閣が、六月四日、発足した。閣僚は全部で三十人。また、特に政策決定の中核機関として、十一人の有力閣僚からなる主要閣僚委員会（イナナー・キャビネット）も同時に設置された。この委員会は、五つの政策小委員会をもち、政策および主な決定事項の優先順位を設定することになっている。閣僚は次の通り（☆は主要閣僚委員会のメンバーを兼ねる）。

☆首相 ジョー・クラーク
☆与党上院院内総務兼法務大臣 ジャック・フリ

国際開発庁担当大臣 マーシャル・アセリン

かし、それよりもっと目についたのは、下院における処理の誤りや、（ときたまではあるが）不品行の徴候であつた。連邦警察（RCMP）の秘密捜査が大きな政治問題になったとき、閣僚たちは口をつぐみ、欺き、ときには嘘さえついているようにみえた。内閣は、トルドー政府を支えるどころか、その足を引っ張るようになった。力のある閣僚は野に下り、大したことのない人が彼らの席を埋めた。トルドー氏が力量のある閣僚を引き留めておけなかったことは、彼は同僚とうまくやつていけないのだという見方に確証を与えるように思えた。彼の人格の一部をなす寡黙で超然としたところやソクラテス式問答あるいは論法を好むくせが、ごく慢で感情のない人間というイメージを与えるようになった。一九七八年十月

☆枢密院議長兼歳入大臣 ウォルター・ペーカー
☆外務大臣 フローラ・マクドナルド

水産・海洋大臣 ジェームズ・マグラス
公共事業大臣 エリック・ニールセン
国家公安委員長兼消費者・法人問題担当大臣
アラン・ローレンス

☆大蔵大臣 ジョン・クロズビー

☆文化大臣兼通信大臣 テビッド・マクドナルド
労働大臣 リンカーン・アレクサンダー

☆調達大臣 ロッシュ・ラサル
運輸大臣兼小麦局担当大臣 ドナルド・マザン
コウスキ

地域開発大臣兼住宅公社担当大臣 エルマー・マツキ

インディアン問題・北方開発大臣 ジェイク・エンブ

郵政大臣兼環境大臣 ジョン・フレージャー
☆連邦州関係担当大臣 ウィリアム・ジャービス

の補欠選挙で明らかになったように、首相自身が、自らが率いる連邦政府の大きなマイナス材料になったのである。この補欠選挙で、自由党はオンタリオ州の八議席をすべて奪われた。八議席のうち五議席は、自由党閣僚が占めていた議席であつた。しかしトルドー首相がマイナス材料になったとはいっても、自由党にとっては同時に大きな財産でもあつた。トルドー氏は一九六八年に党に勝利をもたらした、一九七四年に再び党を救ったのだ。今度の選挙前の世論調査でも、自由党は各地で保守党に遅れをとっていたものの、首相として最適だとして人々があげた人物の中では、トルドー氏がクラーク氏をはるかに引き離していた。そこで五年以内に選挙を行なわなければならないという

国防・復員軍人担当大臣 アラン・マキノ
☆歳出大臣 シンクレア・ステイブンス
農務大臣 ジョン・ワイズ
雇用・移民大臣 ロナルド・アトキ

☆エネルギー・鉱山・資源大臣兼科学技術担当大臣
レイ・ナティヤン

厚生福祉大臣 テビッド・クロンビー
☆通商産業大臣兼経済開発担当大臣（兼経済開発閣僚会議議長）ロバート・デ・コト

社会計画担当大臣 ヒュワード・グラフティ
国務大臣（歳出省担当） ベリン・ベッティ

国務大臣（運輸担当） ロバート・ハウイー
保健体育・多様文化担当大臣 ステイブン・パ

プロスキー
中小企業担当大臣 ロナルド・ハンティング

ト
対外貿易担当大臣 マイケル・ウィルソン

法に従つて、今春、やむなく選挙を公示した自由党は、ジョー・クラーク氏とトルドー政権の実績に対して、トルドー氏と国家統一をもつて戦わざるを得なくなつたわけである。

自由党は、両候補者の指導能力を争点にしようとした。国家統一に対する攻撃がカナダの存続を脅やかしている状況の中で、ペテランのトルドー氏に対抗する相手は新参のクラーク氏。金持ちの（西部）諸州が連邦の権威に戦いをいどみ、ケベックが分離を求める州民投票を行なおうとしているときに、国のリーダーシップをジョー・クラーク氏にまかせることはできない、と同党は論じた。クラーク氏は経験不足で弱過ぎるし、毅然とした態度がとれない。トルドー氏はどんな人でも対処できることを何度も実証して